

nikkor club

286
2026 AUTUMN

nikkor
club

特集

Zと駆ける秋
感情を揺さぶる光と色彩



CONTENTS



表紙写真 谷角 靖

9月になると極地のツンドラは夏の終わりを告げ、真っ赤に紅葉する。白夜は終焉し、暗闇がオーロラとともに舞い戻る。全天に広がるオーロラと湖に映る姿を撮影。超広角レンズでありながら、オーロラの中に輝く極小の星の集まり「昴」もしっかりととらえている。(カナダ ユーコン準州)
Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・8秒・ISO8000

04 Thanks Day 2026

特集

10 Zと駆ける秋 感情を揺さぶる光と色彩

写真・解説 酒井梨恵／井上卓郎／佐藤倫子／甘夏蜜柑／谷角 靖

会報286号 サロン・ド・ニッコール

- 40 カラー部門
選評：熊切大輔（1～3席）／大西みつぐ（佳作）
- 52 モノクローム部門
選評：ハナブサ・リュウ
- 60 ネイチャー部門
選評：三好和義
- 68 得点表／総評
- 70 予選通過者一覧

作品

- 06 THE GALLERY企画展
「JETBIRDER」中野耕志
- 表4 秋山華子×ZR

製品情報

- 22 ZRで撮る「静止画」の魅力
斎藤勝則／渡邊智之
- 24 PRODUCT REVIEW VOL.36
イメージングレシピ 上田晃司

連載

- 表2 Photography Portfolio Vol.10
小林紀晴
- 26 アベっちの使った!撮った! vol.14
NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S II 阿部秀之
- 28 エプソン 楽しくきれいにプリント講座 Vol.29
理想のプリントを目指すための心構え
河野英喜
- 30 新製品の開発秘話、教えてください! 開発者Special Interview
Vol.4 ニコンダイレクト オリジナルグッズ

インフォメーション

- 02 Nikon Creators 応援
Autumn Campaign 2026
- 08 74th NIKKOR PHOTO CONTEST
入賞&展示情報
- 09 写真展スケジュール
- 32 ニッコールクラブ 会員特典のお知らせ
- 34 メガネレンズも「ニコン」
- 36 Let's Go Nikon College!
「イルミネーション撮影講座」阿部和美
- 37 PHOTO HUB 写真展レポート
- 38 PHOTO HUB 活動レポート
- 71 マンツーマン写真講習会レポート
- 72 会員写真展 PickUP!
「紡ぎの里に生きる」横山哲之
ニッコールクラブ千葉支部 創立30周年記念写真展
ニコンプラザ THE GALLERY 応募
「島の伝統を繋ぐ村人たち」土岐令子
「ミステリーボックス2」法橋慶子
「吐息」上本恵一
- 74 支部だより
- 75 イベントニュース
- 76 NCニュース
- 78 メールアドレス・会員登録でもっとお得!もっと便利!
- 表3 自分らしい表現をNikon College
- 巻末 ニッコールクラブ登録情報変更依頼書
会報287号フォトコンテスト応募規定

Zと駆ける

秋

感情を揺さぶる
光と色彩

「秋の写真」で括ってみても、

光の向きや時間、場所、込められた想いが変われば、

その表情はまったく違って見えます。

今回、5名の写真家が見つめたのは、そんな秋の二瞬。

光と影、色彩と階調、その場に漂う空気まで写し取ることで、

心を動かす秋の情景を描き出しました。

Zを手に、まだ見ぬ秋を探しに行きましょう。

nikkor
club





nikkor club

屏写真：甘夏蜜柑
Zf・NIKKOR Z 24-200mm
f/4-6.3 VR・f/6.3・1/250
秒・ISO400



前ボケで描く、秋色のレイヤー 道端にあった花壇の花と葉、黄色い椅子とカラフルな色が入るようにしゃがみ、カメラ位置を低くしました。また、前ボケを大きく入れるためレンズの目の前に花と葉がくるよう花壇に近づき撮影。絞りを開放f値近くまで開けることで柔らかないボケ味を強調し、主役を引き立てることができました。

Zf・NIKKOR Z 40mm f/2 (SE)・f/2.8・1/500 秒・+1.3EV・ISO800

短い季節の中で 色を探しもとめて

酒井梨恵 写真・文

色褪せた季節だからこそ 見つかる色がある

秋になると落葉樹の葉が赤・黄・オレンジと色づき始め、色づいてはどなくすると葉が落ち枝だけになり冬を迎えます。春にはカラフルで華やかな彩りが、夏には輝くような光が街中に溢れますが、秋になると「色」が少なくなるように思います。

色が褪せて冬に向かっていく秋ならではの儚い雰囲気がとても好きで、その時にしか見つけることのできない「色」を探して街中を歩きます。また、夏の名残で日差しが強い日もあるので、露出補正をプラスにし作品全体を明るくすること、影のトーンを薄く和らげるように調整して、街を包み込むような穏やかで軽やかな光を演出しています。

街中をスナップする際は小型で機動力のあるZfとNIKKOR Z

DX 16-50mm f/3.5-6.3 VRの組み合わせがお気に入り。

パッと瞬時に撮影できるような必ず片手でカメラを持ちながら街中を歩いたため、ずっと持っていたも疲れない軽量の機材だからこそ負担が少なく撮影に集中することが出来ます。また、散策中、気になる瞬間に出会えたら、同じ被写体へアプローチする距離を変えたりといろいろな角度からとらえられるため、NIKKOR Z DX 16-50mm f/3.5-6.3 VRは広角から中望遠までと、どんな表現も高画質で応えてくれる幅の広さが魅力です。

そして、もう一つの相棒はZfに小型・軽量のNIKKOR Z 40mm f/2(SE)。写真は二次元で表現する世界なので、どうしても平面的に感じてしまう場面が多々あります。そんなときは、単焦点レンズの柔らかないボケ味を活かすことで作品に立体感が生まれ、その場

秋色



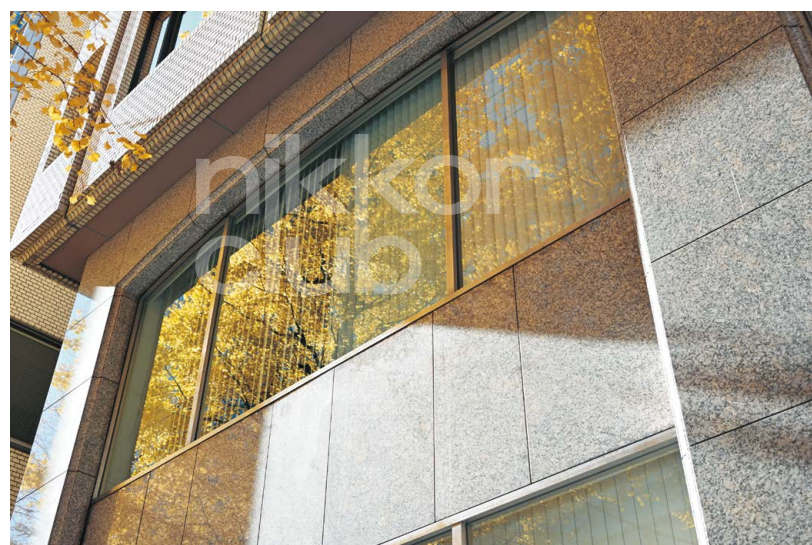
街に映り込む秋色を探す 奥に見えるイチョウの色が道端にあった黒いテーブルに反射し、とても美しい光景でした。大きな柔らかいボケ味の描写が最大限発揮されるよう最短撮影距離で撮影。マニュアルフォーカスに切り替え、テーブルの奥側にある縁にピントを合わせました。黒くて艶のあるテーブルや壁は周りの色を反射することがあるので、街中で見つけた時はいろいろな角度から反射する色を探そうにしています。

Zf・NIKKOR Z 40mm f/2 (SE)・f/2.2・1/800 秒・+1.3 EV・ISO800



光と影がつくる秋の空間 太陽の光と青空が窓ガラスに反射し目を引きました。空間の広がり、高さを強調するために広角の焦点距離を選択。奥にある紅葉した木の色合いをシャープに見せたかったので絞りをf/8に絞りパンフォーカスで撮影。手前の光と影を入れプラスの露出補正で仕上げることで秋の柔らかい光を表現しました。

Zfc・NIKKOR Z DX 16-50mm f/3.5-6.3 VR・f/8・1/200 秒・+1.0 EV・ISO400



壁に宿る秋の光 光が強く当たっている壁にピントを合わせることで秋の日差しそのものを主役としました。街中には建物の壁、窓など周囲の色を反射する素材がたくさんあります。今回は建物のすぐ横に立っていたイチョウが窓や建物に反射し、とても目を引く光景でした。色と形を組み合わせることで、より「色」の存在感が増しました。

Zf・NIKKOR Z 40mm f/2 (SE)・f/5.6・1/80 秒・+1.3 EV・ISO100

の臨場感が伝わるよう意識しています。
 暦の上で秋になってもまだまだ暑さが残り、気づくと瞬く間に冬へと季節が移るため秋はとても短く感じられます。そんな儚い時期だからこそ、秋の中でしか出会えない「色」を見つけ、束の間の時間を大切に表現していきたいですね。

Profile

さかい・りえ 1979年、東京生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、竹内敏信氏の事務所に入社し、2009年よりフリーランスフォトグラファーとして活動。都会や下町などで「色」「形」「光」を探したスナップ作品や、素朴に生える草の形に魅せられた作品制作にも取り組む。公益社団法人 日本写真家協会 (JPS) 会員

収まりきらない 秋の山岳

井上卓郎 写真・文

山岳

山の色をそのまま残す

紅葉を前にすると、誰でも彩度を上げたくなるものです。私も同じ。一面の赤や黄を見た瞬間の高揚を、そのまま一枚に押し込みたくなります。

ところが、これがなかなかうまくいかない。自分の目が見ていた印象を、sRGBという限られた色域と輝度の枠に収めようとすると、どこかが必ず破綻してしまう。赤を持ち上げれば葉の質感が消え、階調を守れば感動が薄まる。山で見ている色は、思っているよりずっと広いのです。

ここ数年はHDRで仕上げることで増えてきました。テレビやスマホといった視聴環境がHDRに最適化されてきたからです。紅葉のような広い色域と輝度を扱えるので、データをこねくり回さなくても見たままの光が素直に出ます。量販店のテレビに流れる映像のよ

うな派手さではなく、あくまで記録した光を残すために使います。誌面でお見せできないのが残念です。

山の紅葉は待つてくれない。標高2000mを超える一帯では、色づきはじめてから落葉まで10日ほど。そこへ天気周期と初雪が重なる。気温の推移を追い、紅葉情報を睨み、どの日に山に上がるかを決める。勝負はカメラを構えるずっと前から始まっているのです。

とはいえ、鮮やかさばかり追いかけていると、山そのものが楽しめなくなってしまう。潤沢なほどの鮮やかな紅葉はぜひ一度は見て、撮ってもらいたいものです。ただ、私が近ごろ惹かれるのはその後にやってくる時間のほうかもしれせん。人もまばらになり、色が抜け、草が枯れ、朝の霜が光る。「侘び寂び」という言葉がいちばん似合うのが、晩秋の高山だと思っています。

やがて冬が来て、高山帯は閉じられます。夏山の終わりを感じながら、一年を振り返るように撮る。秋の撮影には、そういう静かな区切りがあるのです。

いちばん広い色域を持っているのは山そのものです。その光を、Zシリーズは余さず受け止めてくれる。今年の秋がどんな色をしているのか、ぜひ登って確かめてみてください。

Profile

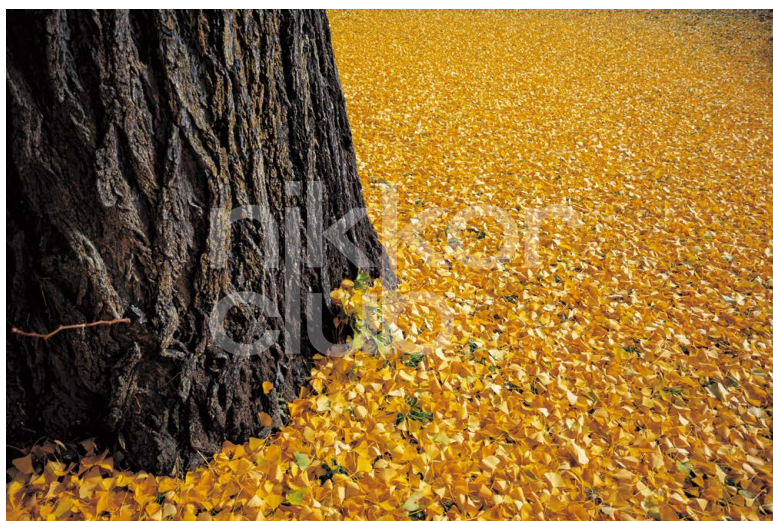
いのうえ・たくろう 映像家。北アルプスの麓、松本市を拠点に、日本の山々や自然、そしてそこに暮らす人々を題材とした映像制作を行う。観光系自治体や企業、アウトドアメーカーのプロモーション映像をはじめ、博物館・ビジターセンター向けの展示映像コンテンツを数多く手がける。近年は、カラーグレーディングやHDR映像の制作にも力を入れている。



彩度ではなく、深みで見せる紅
黄昏時のくじゅう連山。この赤を前にすると、どうしても彩度を上げたくなります。ただ上げただけでは色が濁って破綻します。赤の彩度を上げたぶん、同じ赤の輝度を下げます。それだけで、彩度は高いのに深みのあるリッチな色に落ち着くのです。
Z8・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/13・1/6秒・ISO640



補色で引き出す、紅葉の色 涸沢カールの紅葉を、谷を挟んだ蝶ヶ岳から狙います。彩度を上げすぎると岩肌まで濁ってしまうので、代わりに暗部へ薄く青を乗せました。補色の効果で、紅も黄も彩度を上げずとも引き立ちます。
Z9・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/10・1/10 秒・ISO100



色を足さずに 秋を写す 落葉の黄と樹皮の黒褐色だけでできた画面。黄色は飽和しやすく、彩度を欲張ると葉一枚の形が消えてしまいます。ほぼ撮って出しの状態、後処理は加えていません。日陰の樹皮まで階調が残るのは、素直に写してくれるセンサーの余裕です。
Z50II・NIKKOR Z DX 16-50mm f/3.5-6.3 VR・f/3.5・1/800 秒・ISO100



動画から切り出す 静かな秋景 Z9の「8.3K RAW “動画”」から切り出した一枚。動画編集ソフトでカラーグレーディングを行っており、映画のようなしっとりとした質感を表現できました。水の流れは編集時に複数フレームを重ね、長秒露光と同じ効果を加えています。暗部の苔の緑を残せるのもRAWならでは。
Z9・NIKKOR Z 24-70mm f/2.8 S・f/5.6・1/30 秒・ISO800・N-Raw (Standard)



異なる光が交差する 秋祭りの夜 本殿を照らす温かみのある光と、舞台を彩る白い照明の対比が秋祭りの熱気を醸し出しています。視線を少し上へ導く構図により、流れる雲の表情と秋夜らしい空気感を強調。手前の人混みが黒く潰れそうな難しい場面ですが、撮って出しにも関わらずZ6IIIのダイナミックレンジ性能で暗部が持ち上がり、会場の賑わいや臨場感を余さず写し出すことができました。

Z6III・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/5.1/100秒・ISO6400

光で表現する情景

秋の澄んだ空気の中に浮かぶ中秋の名月、にぎわう秋祭り。秋の夜ならではの表情を並べてみました。どちらも夜の撮影が中心となるため、ISO感度を高くして撮

影する場面が多くなります。以前は高感度撮影といえばノイズとの戦いでしたが、近年はカメラの高感度性能の向上に加え、ノイズ除去機能も進化し、以前より気軽に挑戦できるようになりました。もちろん、ノイズを消しすぎると細か

佐藤倫子 写真・文

秋夜を描く祭りの色と光



観客まで含めた「一体感」がポイント 薄明かりは観客の表情にも当たります。演者だけでなく、観客の表情も画面に収めることで、瞬間の熱気や感動を伝えることができます。暗所でもブレを抑えることのできる高精度な描写性能により、会場を包み込む一体感をリアルに描きました。

Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/3.5・1/200秒・ISO5000

夜祭



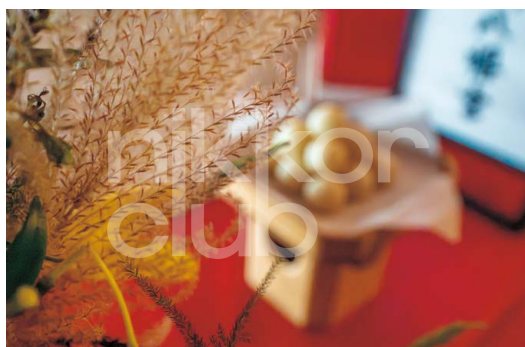
一筋の光が浮かび上がらせる表情 ステージから漏れるスポットライトを利用し、出番を待つ獅子の表情を印象的に狙った一枚です。Z8の優れた高感度耐性と描写力で、静けさと緊張感の漂う影の美しさをドラマチックに描き出すことができました。

Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・1/250秒・ISO10000



光と影に残る 祭りの余韻 舞を終えて退場するシーン。ここでのポイントも、影になりやすい観客席を階調豊かに表現することです。光と影が織りなす空間美を意識することで、より神聖な空気感や余韻を表現できたのではないのでしょうか。

Z8・NIKKOR Z 24-200mm f/4-6.3 VR・f/4.5・1/320秒・ISO6400



夜を彩る 黄色と赤 神社をイメージさせる毛氈の赤の上に、色的に相性のよい黄色系の月見団子やススキを発見。ススキにピントを合わせ、ボケを生かしつつ奥行きを演出しています。

Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・1/250秒・ISO10000

Profile

さとう・みちこ 株式会社資生堂宣伝部写真制作部に入社。退社後、フリーランスに。独自のオリジナリティな構図でその世界観を切り抜く。クリエイティブスナップ®作品を中心に個展・グループ展を開催。公益社団法人 日本写真家協会 (JPS) 会員。富岡八幡宮 公式写真家



夜祭りで狙いたい「動と静」 スローシャッターによる適度なブレが、人の行き交う賑わいや躍動感を印象づけ、さらに静止した赤い鳥居との対比によって、祭りの活気をより際立たせています。

Z8・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/7.1・4秒・ISO100

な質感まで失われ、不自然な仕上がりになることもあります。写真本来の空気感を残すためにも、やりすぎには注意したいところです。

秋の夜空は魅力的です。日が落ちたあとの深い青や、月明かりに照らされた雲は、この季節特有の美しさがあります。掲載作品は全てピクチャーコントロール「オート」。特別な設定でなくとも繊細な色合いで、美しく再現してくれます。

また、夜の撮影では光をどうとらえ、どう見せるかが作品の印象を大きく左右します。祭りのステージを照らす力強いライト、境内の提灯や燈籠の灯り、それぞれ

の光には異なる表情があります。主役を際立たせる光なのか、季節感や情緒を演出する光なのかを意識するだけで、写真の雰囲気は大きく変わります。光を背景として取り入れるのか、それとも被写体を照らす存在として活かすのか、撮影しながら考える時間も夜景撮影の醍醐味です。

一方、屋内撮影では、限られた照明の光をどう生かすのが大切で、明るく写そうとするだけではなく、その場にある光を引き立てることで、空間全体の雰囲気までも表現することができます。光の見せ方ひとつで、写真の印象は大きく変わります。



夕景が描く、水面の陰影 強い逆光が作り出す、夕暮れのドラマチックなコントラストに目を奪われてシャッターを切りました。f/7.1までしっかりと絞り込むことで、差し込むオレンジの閃光を美しくコントロールしながら、画面全体を引き締めています。お気に入りのポイントは、夕日に照らされて水面に浮かび上がった、風の模様です。その繊細な質感を逃さずに描き切ることで、静かな物語を感じるランドスケープに仕上がりました。
【ゆうやけこやけ】Zf・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/7.1・1/125秒・ISO100

陰影（シャドウ）に

宿る秋の温度

甘夏蜜柑 写真・文

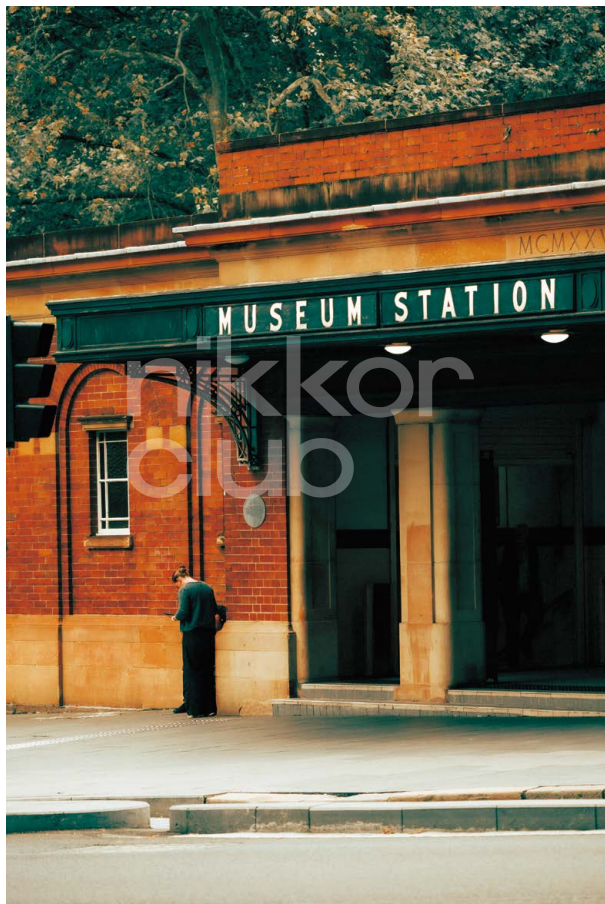
秋のシャドウには
温かさが宿る

秋という季節は、葉が色づき、木の実が実り、夏の暑さが過ぎ去って冬へと向かうグラデーションの美しさを持っています。その過程で訪れる街並みの灰暗さや、そこに漂うほんのりとした温かさ、私は強く魅力を感じています。夏の木陰が「涼しさ」を連れてきて、冬の暗がり「寒さ」を感じさせるのとは違い、秋のシャドウ（影）には不思議と「温かみ」が際立つ独特の感覚があると思います。今回のセレクトは、まさにその『シャドウに宿る秋の温度』をメインテーマに据えました。

スナップ撮影において、私は街

全体の広がりをとらえるランドスケープ（風景）の視点と、普段なら誰もが見逃してしまうような小さな一部をすくい取る細部の視点、その両方を大切にしています。夕暮れのダイナミックな川辺やクラシカルな駅舎という全体の景色。そして、足元の落葉や草木の静かなディテール。これらを画面から不要な要素を削ぎ落とす「引き算の構図」でとらえ、レタッチによって理想の色味と深いシャドウの質感へと丁寧に追い込みました。

アンダー調の静かな描写がベースですが、カメラセンサーの優れた解像力とレンズの描写性能を活かすことで、湿った路面のリアリティや、強い明暗差の中に残る繊細な葉脈のディテール、そして夕



低い光が知らせる秋の訪れ 3月のシドニーで出会った、南半球の秋の始まりを告げる街角の景色です。紅葉がなくても秋らしさを感じるのは、この季節特有の低い光が街を包み込んでいるから。望遠側の120ミリ・開放f/4でグッと引き寄せることで、歴史あるレンガブロックの硬い質感と、秋の装いを象徴するセーターの柔らかな質感を対比的に写しています。レタッチでレンガのあたたかい暖色を丁寧に整え、静かな秋の空気感を凝縮した一枚です。
【シドニー秋支度】Zf・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/4・1/500秒・ISO320



シャドウが引き立てる秋色 葉のわずかな色づきの差と、そこに実る鮮やかな赤が綺麗だと思い、最望遠の200ミリでグッと引き寄せて切り取りました。背景を大きくぼかして整理し、明暗差を活かして周囲のシャドウを少し深めることで、主役のディテールを引き立たせています。Zfの確かな描写性能のおかげで、強い光が当たるハイライトの質感を損なわずに、秋の気配がぎゅっと凝縮された立体感のある一枚に仕上がりました。
【紅の実】Zf・NIKKOR Z 24-200mm f/4-6.3 VR・f/6.3・1/500秒・ISO100



引き算で見つける秋 見逃しがちな足元の秋を切り取った一枚です。雨に濡れたしっとりとした地面の中で、ぽつんと落ちていたイチョウの美しさに惹かれました。しっとりした地面の質感を残すため、あえて開放(f/2.8)からf/3.5へと少し絞ることで、葉の上の小さな雨粒のきらめきや、葉脈にフォーカスし、Zレンズの圧倒的な解像力でドラマティックに描き出しました。視線をイチョウ一枚へ集中させる、「引き算の構図」を意識しています。
【イチョウと雨粒】Z6III・NIKKOR Z 28mm f/2.8-f/3.5・1/400秒・ISO640

暮れのシルエットの輪郭までを、破綻なく緻密に表現しています。暗がりがあるからこそ、そこに差し込むわずかな光や秋の色彩が、より一層愛おしく浮かび上がります。今回のテーマを通して、日々の何気ない瞬間に潜む、静かで、少し切なく、あたたかい秋の美しさを感じていただければ幸いです。

Profile

あまなつ・みかん 2018年にフォトグラファーとしてSNSでの発信を開始。活動を続ける中で写ることの楽しさにも魅了され、現在は被写体兼フォトグラファーとして、撮る・撮られる双方の視点から表現を行っている。ポートレートを中心に、日常の一瞬や旅先の風景などを撮影。温かみのある柔らかなトーンと、光を生かした表現を得意とする。

世界の秋景色

谷角 靖 || 写真・文

極北で出会う 秋色とオーロラ

Zシリーズが2018年9月にデビューしてすぐNを入手。北緯60度を超えるカナダ極地のオーロラと紅葉の撮影で使用し、あれから8年が経ちました。その頃の極地はベリーなど低木のツンドラが真っ赤に染まり、マイナス40度にもなる冬の極寒期とは違い、湖や川が凍結することもなく、秋の風物詩「水鏡のオーロラ」を撮影することができました。

それまで光学ファインダーでの撮影に慣れていたので、Zシリーズを使い始めた当初、ミラーレス機特有の液晶ファインダーには、少々戸惑いを覚えました。しかし、使い込んでみるとファインダー内ではフォーカスを拡大して確認でき、さらにはピクチャーコントロールによる色の仕上がりまでチェックできるなど、デジタルの利点が詰まったカメラだと感じました。

レンズも年々ラインナップが充

実しています。NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 Sを撮影したオーロラ作品は開放f値ですが、開放にも関わらず星が隅々まで点で描写され、周辺光量の不足も全く気にならない性能を誇ります。

かつて、暗い撮影地では液晶に何も映らず、構図は勘頼みに近いものでした。しかしZ9以降は「スターライトビュー」機能が搭載され、構図やフォーカスなど、液晶モニターやファインダー内において、目視以上の明るさで視認・調整できるように。また、日陰などの暗所では「アクティブDライティング」が重宝します。白トビや黒つぶれを自動で抑えてくれる機能で、「強め」に設定することで、露出を変えることなく暗部を持ち上げることができる優れたものです。

オーロラの僅かな光だけでも描写を可能にしてしまうZシリーズ。自分の経験や技術、カメラ機能も合わせ、作品づくりは進化し続けているのです。

極地

Profile

たにかど・やすし 脱サラ後カナダへ渡りオーロラと出会ったことをきっかけにNikon FAで写真を始める。オーロラを撮り始めて3年目ニコンサロンJuna21で写真展開催。Nikon D100の時代にデジタル写真を始め、機材はニコン一筋でフィルムでは35mmだけではなく大判ニッコールも使用。現在は映像と静止画の両刀使い。



朝日に染まるツンドラ紅葉

夜が明けるとオーロラは姿を消し、一面に広がるツンドラの紅葉が目を楽しませてくれました。日の出前、逆光気味の空でしたが、「アクティブDライト」を「より強め」にして逆光で暗くなった紅葉を明るめに設定。奥行きのある風景を魅せるため、絞りf/18、回折補正オンにして撮影し、隅々までシャープな画像に仕上げました。

Z8・NIKKOR Z 14-24 mm
f/2.8 S・f/18・1/2.5 秒・
ISO200



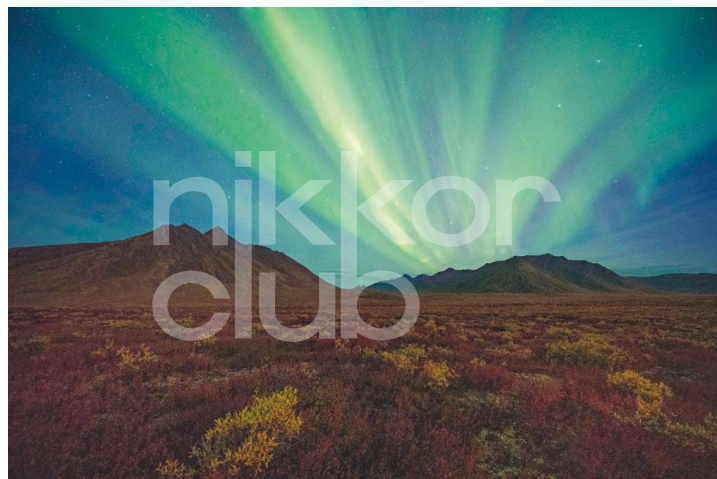
トワイライト時、水鏡に映る北極の秋 時には朝までオーロラが舞い続けるこの季節、夜通しの撮影で、トワイライトの空になる明け方のオーロラを狙いました。Z8はUSB給電ができ、モバイルバッテリーで給電しながらの長時間撮影が可能。撮影中、バッテリー交換をしないで済むので撮影チャンスを逃さずに済みます。

Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・13秒・ISO6400



月明かりが照らす秋夜 月明かりを生かした長時間露光で、オーロラと紅葉を狙いました。Z8はISO4000程度ならノイズ感がまったくなく、夜間でも日中撮影に迫る画質で作品づくりが可能です。

Z8・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・2秒・ISO4000



紅葉を包む天空のカーテン ツンドラ紅葉の上空に広がるオーロラ。肉眼ではほとんど見えない風景ですが、ISO2500で長時間露光撮影したことで紅葉がはっきりと確認できます。NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 Sは暗い場所の星もシャープにとらえることができる、世の中で一番好きなレンズです。

Z7II・NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S・f/2.8・5秒・ISO2500

秋山華子 × Z R



ZR・NIKKOR Z 26mm f/2.8・f/2.8・1/800秒・ISO200

広々としたモニター越しに
目の前の光景と向き合うと、
街の息づかいが
自然と伝わってくる。
確かなAF性能が
歩くリズムに寄り添い、
ふと見つめ合った
一瞬の出会いを
そっと掬い上げた。